

香りの力で認知症を予防する

鳥取大学大学院医学系研究科保健学専攻・病態解析学分野 浦上克哉

認知症の中で一番頻度が高いのがアルツハイマー型認知症である。アルツハイマー型認知症はもの忘れから始まるといわれているが、実は嗅覚障害が先に起こる。最初に臭神経が障害され、次いで海馬の神経細胞が障害される。そこで嗅覚障害はあるが、もの忘れはまだないという状態で香りによる嗅覚刺激を行えば認知症を予防できる可能性が考えられる。

香りを発する物質としてアロマオイルを用いるが、どの種類を用いるかは文献から有効性が期待されるオイルを絞込み詳細な検討を行なった。その結果、レモンとローズマリーの配合が最も神経細胞を活性化させることが分かった。これらは昼間に使用して神経細胞を活性化し、また夜間には夜用アロマということで真正ラベンダーとスイートオレンジの配合で使うと神経細胞の癒し効果があることも見出した。アルツハイマー型認知症ではアロマセラピーにより顕著に改善効果がみられた (図 1)。

これまでに我々の研究グループはアルツハイマー型認知症で嗅覚障害があり、嗅覚機能検査が早期診断に役立つことを報告していたが、残念ながら予防や治療に結びついていなかった。研究成果が予防や治療に直接結びつくことが臨床研究者としては最高の喜びである。しかし、近年の不況のあおりでこのアロマセラピーを商品化しようとした際、なかなか企業に参入して頂けなかった。そこで、鳥取大学発ベンチャー企業 (株式会社ハイパーブレイン) を平成 21 年 7 月 2 日に立ち上げを行い、商品の製造販売が可能となった。現在昼用アロマと夜用アロマ (図 2) として製品化し、大変好評を頂き順調に販売されている。多くの方に活用して頂けることを期待している。

参考文献

- ① 浦上克哉：これでわかる認知症診療、南江堂、2009.
- ② 神保太樹、浦上克哉：くすりに頼らない認知症治療Ⅱ、第 4 章アロマセラピー、ワールドプランニング、2009.
- ③ 浦上克哉：認知症、よい対応、わるい対応、日本評論社、2010.